



「男らしく」「女らしく」から  
「私らしく」  
「あなたらしく」へ

門 更 月

私が二十代前半の頃からフェミニズムいわゆる女性解放運動に関わるようになったきっかけは、大学四年生の時に体験した就職活動である。私は中学時代から新聞記者になりたかった。それも海外特派員にあこがれていた。それをめざして大学を選び進学した。それなのに「女だから」という理由で新聞社の採用試験さえ受けられず、またマスコミ関係の会社の大部分が「男子のみ」の採用しか行なわなかった。一般の企業も同様であった。昨日まで同じ教室で机を並べていた男子学生は、大企業といわれる会社に早くから内定していたのに、女子学生で卒業式の日就職が決まっていたのは、十六人中たったの四人であった。私は悔やしくてたまらなかった。なぜ「女だからダメ」なのか。なぜ女は自分の思うような生き方ができないのか。この時ほど女に生まれたことを恨めしく思ったことはない。

しかし、自分の持つて生まれた性を否定することは自分自身を否定することにつながる

り、男であつたらとかなわぬ願いを抱きながら生きていくのはあまりにもみじめであった。そんな時、長崎市を中心に活動している女性問題研究会「ばってん・うーまんの会」に出会ったのである。元氣な彼女たちの「女が、女に生まれて良かった、もう一度女に生まれると思う世の中にしようよ。」ということばに私は救われたような気持ちになった。あれから、十余年。会は私の心の支えであり、成長の場であった。自由であるということは、自分の思うことを表現し、思うとおりに行動できることである。平等であるということとは、不合理な理由で不当な扱いを受けないことである。そう考える時、私たち女はまことに不自由な生き方や不平等な立場に追いこまれており、自由と平等を核とする基本的人権を侵害されている。私個人が受けた男女差別を女性全体の普遍的問題として考えることができるようになったのも、会の仲間との活動を通してであった。

さて新聞記者の夢破れた私は、現在高等学校で教鞭をとっている。地方で女性が一生続けられ、仕事内容が男も女もあまり変わらないだろうという理由で選んだ職業である。ところが教員世界にも男女差別は存在する。特に高等学校は女性教員が職場に十人以上いないというまさしく男社会だから、男性中心の

意識や男性優位のしくみが根強く残っている。例えば学級担任一つとっても十七、十八歳の男子高校生を指導できないだろうという理由で若い女性教員が担任からはずされることがある。私自身、新任三年目で同期の男性が担任をしたのに私はさせてもらえず、悔やし涙を流したことがある。同僚の女性も四年間希望したのに担任になれなかった。それでも最近では女性教員が増加したこともあって、担任をしている女教師も多いが、それは男性が担任を敬遠するような周辺校であって、多くの男性が担任を希望するような進学校ではまだまだ少ないのではないだろうか。

ところでこの事については「女性の多くがきつい仕事である担任をやりたいがらない」という反論が予想される。確かにそういう状況はあるかもしれない。例えば若い人の場合を考えてみると、男と女二人の若い新任の教員が二年目を迎える時、周囲の男性教員たちは男の新任教員に対して「もう担任をしなければならぬよ」と厳しいいはばをかけるが、一方の女性新任に対しては失敗もかばってやったりして優しいという状況をよく目にする。これでは女性が一人前の教師として育つことを妨害していることにならないか。私はこれも差別だと考えるのである。つまり女性を一人前の職業人として期待しない職場の雰

囲気が、女性に甘えとあきらめをもたらしているのではないだろうか。また既婚者の場合は家事、育児が一方的に妻に負担がかかっているため、担任をしたいという気持ちを持っていても、物理的に不可能というのが実情であろう。これらの背景には、「男は外（仕事）で女は内（家庭）」という従来からの性的役割分担の考えがあり、職場における女性の地位の低さにつながっている。

一九八五年に日本政府も批准した「女子差別撤廃条約」では性的役割分担を解消することが男女平等の一步だとしているが、現状では男女の特質論からくる「男らしさ」「女らしさ」を理由に固定的な男女の役割分担がなかなかなくなるならない。

学校現場でもしかりである。例えば校務分掌でも女性教員は環境美化や会計や書記といったいわゆる細かい仕事、企画、立案というよりは根気のいる地道な仕事をまかせられることが多い。それは女性というものがきれ好きで几帳面で小さいことによく気がつくと思われられているからだろう。また行事といえはすぐに机ふきに茶碗洗いといった家事的仕事や、職場の花としての受付嬢をさせられる。その典型が卒業式で卒業証書を手渡す校長の介助役ではないだろうか。介助役はなぜか若い女性教員に依頼されることが多い。女

性が華やかだからという理由を耳にするが、ほんとに全女性が華やかだろうか。それに華やかさが必要なら花を飾ればよいのであって、女は花ではないし、置き物ではない。結局、介助のような補助的仕事は女性がするものだということを生徒にも保護者にも印象づけるだけだろう。個人の資質に関係なく女だからという理由で仕事を固定するのはやはり差別である。

このような「女らしさ」の幻想は、当然女子生徒にも向けられる。「女のくせに口答えするな」とか「女だから掃除はまじめにしろ」等と言うのは日常茶飯事のことであり、進路指導においても「女は短大ぐらいでよい」とか「女は結婚までの仕事だから」等ということがまかり通っている。また学級委員長は男子で副委員長は女子とか、何をするにしても男が先で、女は後という順番。特に生徒に要求される「男らしさ」は責任感、積極性、行動力など集団のリーダー的要素であるのに対して、「女らしさ」は優しさ、素直さ、よく気がつくといった縁の下力持ち的要素である。これではいつも男が主で女は従、女は男に従いついて行くという生き方が子供の頃からしつけられてしまうのではないだろうか。

戦後の民主教育の柱の一つが男女平等教育

であるということからも、そして女性の人権を保障するという観点からも、我々教員は教育現場から男女差別をなくしていく努力をしなければならぬ。そのためには、まず自分の意識にしみついていく「男らしさ」「女らしさ」の固定観念を消し去る必要がある。私たちは日本社会で男らしく、女らしく育てられてきたため、確かに男性に共通するもの、女性に共通するものがある程度備わっているかもしれない。しかし、それはさほど重要な事ではない。だって生徒を一人一人観察すれば、たくましく活発で積極的に行動する女子生徒もいれば、優しく繊細で内気な男子生徒もいるということをや我々教員が一番知っているはずだ。昨年の婦人週間のキャッチフレーズは「いま個性が性を超える」だった。流行歌の歌詞のように「女だっていろいろ、男だっていろいろ」あるのだ。私たちは一人の人間を女・男の枠にはめこんで育てるのではなく、一人一人の豊かな個性を引き伸ばすよう努めなければならないと思う。

次に、教育現場において男女差別を助長するものをとり除く必要がある。すぐに取り組めるものとして、長・副をやめて女・男各一名の委員にするとか、男が先、女が後の名簿をやめて男女混合名簿を取り入れるとかが考えられる。ちなみに世界で男女混合名簿でな

いところは日本と韓国だけである。あるアメリカ人女性は今が終わった後、女が呼ばれるのは屈辱だと言っていた。名簿によって男と女に分けて班編成をしようことが多いたが、女も男も混じった班で各人の個性をいかした研究発表ができれば、女と男は幼い頃からずっと仲良く理解し合える存在になるのではないだろうか。

私たちが男女平等を叫ぶ時、ただ自分らしく生きたいという切実な願いにつき動かされていただけである。私は女らしくではなく、私らしく生きたい、つまり自由に生きたいだけなのだ。読者諸氏には、目に入れても痛くないほどかわいいと思う娘をお持ちの方もしらっしゃるだろう。彼女の能力をいかし、彼女の望む通りの道を歩ませたいと願っておられるかと思うが、それが「女だから」という理由で拒まれたり、軽んじられたりしたら、あなたもきっと立腹なさるに違いない。僕の娘にはこんな良い点があると主張せずにはいられないだろう。私たちが全く同じなのである。

そして私たちが自由に生きてこそ、男たちも自由に生きられるのではないか。女が「女はかくあるべし」ととらわれている時、男だって「男はかくあるべし」に縛りつけられているのだ。男たる者、胆っ玉が大きく、

小さい事によくよせず、黙って行動で示すべしといった「男らしさ」の型に自分をはめこむのをやめたらきつと楽になるだろう。男だって悲しい時はめそめそ泣いていいのだ。男は一家の大黒柱として妻子を養わなければならないから自分の思うように生きてはいけないなんてあきらめないで。風来坊だって、家庭の主夫だっていいじゃないか。あなたの人生はあなただけのものだから他の人と同じ事をしなくてもいいはずだ。あなたはあんならしく生きたらよい。この世にたった一人しかいないかけがえのないあなたを再発見してほしい。

フェミニズムは一般に女性解放と訳すが、真の意味は女性と男性の解放であろう。女らしさ、男らしさをのり越えて、個人としての女と男が愛し合い、尊重し合い、協力し合って人生を歩むことができた時こそ、ほんとうに私たちは自由であり、平等であるといえるだろう。



and  
thank you..

公衆衛生のプロとして、日本に根づいて働くという私の

まず、2週間遅れで9月4日にハワイに到着。一週間後に、何とか快適な家を見つけ、即入居しました。ナンシーというハワイ生まれのフィリピン人とアパート暮らしで、学校にもスーパーマーケットにも歩いていける距離。で、周りには各国の料理店、日本語書店まであります。

自分の実力を顧みず、火曜日から木曜日まで4つのコースを取り、おまけに我慢できずハワイのフラダンスを習い始めました(週2回)。月曜日と金曜日は、実習生として、老人ホーム(Hale Nani --Beautiful House-- と言うハワイ語)で働いています。後、週一日は、ASSOCIATION FOR RETARDED CITIZENS(ARC)という精神障害者の人々が、地域に根づいて普通に生活していく様に推進しているプロジェクトで働く予定です。有り難いことに、550ccのバイクを非常に安く譲ってもらい、あまりの機動力に嬉しくて、つつい愛用しています。原付のほうが維持が楽だし、島一周の旅に出ようという誘惑に負けてしまい勝ちなので、間もなく売り払う予定ではありますが。

現在私にとって一番の課題は、老人ホームの事です。ハワイ最大の私立のProfit-makingの施設であり、230人程の入居者のうちアジア系の人が過半数以上います。中でも日系の人が多く、今まで日本語のできるスタッフがいなかったのも、見習いの私は日本語しかできない人との対話から始めました。身体的あるいは心的に障害を持った人の為のホームなので、様々な人生に出会います。

つい最近まで自分独りで自分の家に住んでいた為家が恋しくて泣いているMさん、この人は芸術家で素敵な絵を描きます。

いつも、「誰かちょっと来て下さい」と言って叫んでいるNさんが、「誰か助けて下さい。」

N:「気分？気分はまあ良いですがのう。」

私：「私は、最新新しく来たものなのでまだあまり慣れていないのです。」

N:「あなたも今日来たのですか? 私も今日来たのです。毎日此処までバスで通うとります。歩いて来ようかと思うんじやが、もう歳だでう。用心しているんじや。で、もうそろそろ帰ろうかと思って考えておったんじやが。」

私：「でもまだ明るいから、もう少し此処でテレビを見ていかれても大丈夫じゃないですか。」

N:「そうしますかいのう。」

私：「では私また来ますので……。ありがとうございました。さようなら。」

N:「そうですか。はい、さようなら。」

もちろん彼女は此処に住んでいるのですが、誰か人が側にいて日本語で話している限りでは、普通の会話が成立します。昔のことは、正確に覚えています。

~~~~~ (波号K77K)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ 女のノート3年 完売しました。アリガトーツ！ キコゴジ

☆☆☆☆☆☆☆☆ 1992-94 全国の思いがけぬたくさん注文をいただき ありがとうございます。とうとう12月中旬でなくなりまいた。もう増刷も  
だめなのです。注文があと少しの方、ごめんね。3年ぶりネ

1992-94

